

研究

産後3年間における母親の精神状態と
性役割に関する縦断的研究山口 孝子¹⁾, 堀田 法子¹⁾, 下方 浩史²⁾

〔論文要旨〕

産後3年間の母親の性役割を明らかにし、精神状態との関連について分析を行うことを目的とした。家事、育児とも父親が従事する割合は低く、家事および育児役割に対する母親の理想では、STAI, SDSともに「両親同等」と回答した者が最も高かった。現実や父親の認識では一貫した傾向がなかった。家事役割に対する母親の理想と現実との差および父親の認識との差では、12か月までは母親の家事比重が大きいほどSTAI, SDS得点が高く、とくに6か月までに有意差が認められた。育児役割に対する母親の理想と現実との差および父親の認識との差では、24か月までは母親の育児比重が大きいほどSTAI, SDS得点が高く、とくに12か月までに有意差が認められた。

Key words : STAI, SDS, 性役割, 育児期の母親

I. 緒言

少子化、核家族化、都市化などの社会情勢は育児の孤立化・密室化を生み、現在、母親の育児不安やストレスを高めていることが問題視されている。そのような状況下において、父親の育児参加に対する期待が高まっているが、依然、多くの父親が「家事、育児は母親の仕事である」という認識をもっており、現実には多くの母親が家事や育児の中心的役割を担っていることが明らかとなった¹⁾。また、女性の高学歴化や社会進出がみられるなか、母親は育児の意義は認めてはいるものの、育児以外に生きがいを求める意識が強いことが指摘されている²⁾。このように、乳幼児をもつ母親は日々の生活の負担や子どもの成長・発達への責任、自分の生き方や自分自身であることの模索など身体的、精神的、社会的に高いストレス状態にあるといえる。

近年の研究において、育児期の母親の育児不安やストレスなどの精神状態に父親(夫)の要因が強く関連していることが報告されている^{3)~12)}。著者らの6か月児をもつ母親の研究でも、家事や育児に対する母親の理想より、父親の認識や現実で母親の比重が大きい場合、母親の不安や抑うつが強いことが示唆された¹⁾。育児の伝承や地域住民からの援助が困難である現代の育児環境では、母親に最も近い存在であり、人生のパートナーである父親の性役割観や現実のあり様は、育児期の母親の精神状態に強い影響を及ぼすと考えられる。そこで本研究は、産後3年間の母親の性役割、とくに家事および育児役割に対する理想、母親からみた父親の認識、現実を縦断的に明らかにするとともに、これらの性役割と母親の精神状態との関連について分析を行うことを目的とした。

The Longitudinal Study on the Relationship Between Mothers' Mental State and their Gender Role with 6 to 36 Month-old Child [1903]

Takako YAMAGUCHI, Noriko HOTTA, Hiroshi SIMOKATA

受付 07. 1. 9

採用 07. 6. 4

1) 名古屋市立大学看護学部(研究職) 2) 国立長寿医療センター研究所疫学研究部(研究職)

別刷請求先: 山口孝子 名古屋市立大学看護学部 〒467-8601 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1

Tel/Fax: 052-853-8049

II. 研究方法

1. 対象と調査方法

N市の保健所が主催する育児支援事業の参加者52人に調査の趣旨および倫理的配慮（自由意志による参加，個人情報守秘，拒否した場合不利益を被らない等）を口頭で説明し，同意が得られた50人の母親を対象に質問紙調査を行った。調査は子どもが6，12，18，24，30，36か月を迎える1週間前に研究目的と倫理的配慮を明記した調査依頼書と自記式質問紙を母親に郵送配布し，同意が得られた者のみから郵送により回答を得た。

調査内容には，精神状態として日本版 State-Trait Anxiety Inventory（以下，STAIとする）¹³⁾，日本版 Self-rating Depression Scale（以下，SDSとする）¹⁴⁾を引用した。その他は，家事役割に対する母親の理想，母親からみた父親の認識，現実，育児役割に対する母親の理想，母親からみた父親の認識，現実，母親の年齢，父親の年齢，職業の有無，子どもの人数である。

本研究における調査期間は，平成13年7月～16年12月であった。

2. 測定用具

1) STAI

Spielberger, C. D. により開発されたものを中里，水口らが翻訳し，妥当性，信頼性の検証についても実施済みである¹³⁾。構成は2つの下位尺度からなっており，それぞれ20項目である。そのうち1つは状態不安で「有害なものとして判断したとき短時間に誘発される不安状態」を意味し，もう1つは特性不安で「人格ともいべき生来もっている不安」を意味する。回答は4段階評定で求め，下位尺度ごとに合計点を算出し，得点が高くなるほど不安が強いことを意味する（範囲：20～80点）。

2) SDS

W. W. K. Zung により開発されたものを福田，小林が翻訳し，妥当性，信頼性の検証についても実施済みである¹⁴⁾。SDSは抑うつ性尺度であり，「抑うつ性」とは「抑制性」と「憂うつ性」のことであるが，単に「うつ性」ということもある。質問は20項目から構成され，4段

階評定で回答を求め，合計点を算出する。SDSも得点が高くなるほど抑うつ状態が強いことを意味する（範囲：20～80点）。

3. 分析方法

各項目，各尺度を単純集計した後，家事および育児に対する項目における経時変化は χ^2 検定を行い，家事および育児に対する項目とSTAI（状態不安，特性不安），SDSとの関連は対象者数が50未満であるため Kruskal Wallis 検定を行った。家事および育児役割については，母親の理想を基準として父親の認識や現実のずれを点数化した。すなわち，家事および育児役割に対する母親の理想と父親の認識の選択肢である「母親の役割であり，父親の役割ではない（以下，「母親のみ」とする）」を1点，「母親が中心で，父親は補助的な役割を果たせばよい（以下，「母親中心」とする）」を2点，「両親が同等の役割を果たすのがよい（以下，「両親同等」とする）」を3点，「父親が中心で，母親は補助的な役割を果たせばよい（以下，「父親中心」とする）」を4点，「父親の役割であり，母親の役割ではない（以下，「父親のみ」とする）」を5点とした。また，現実の家事および育児役割の質問項目では「母親が一人で行っている（以下，「母親のみ」とする）」を1点，「母親が中心で，父親は補助的に行っている（以下，「母親中心」とする）」を2点，「両親が同等に行っている（以下，「両親同等」とする）」を3点，「父親が中心で，母親は補助的に行っている（以下，「父親中心」とする）」を4点，「父親が一人で行っている（以下，「父親のみ」とする）」を5点とし，母親の理想から現実もしくは父親の認識を減じた得点を「性役割の差得点」とした。つまり性役割の差得点が負方向にあるほど母親の家事，育児の比重が小さく，逆に正方向にあるほど母親の家事，育児の比重が大きいことを意味する。今回は，性役割の差得点が-1，2点は3人以下と少人数であったため除き，0，1点について分析した。0，1点の2群とSTAI（状態不安，特性不安），SDSとの関連は Mann-Whitney 検定を行った。なお，統計処理は SPSS11.0 for Windows を使用し， $p < 0.05$ をもって有意とした。

Ⅲ. 結 果

1. 対象の属性

質問紙の回収数はそれぞれ39, 43, 37, 36, 35, 33人で、回収率は78.0, 86.0, 74.0, 72.0, 70.0, 66.0%であった。

子どもの年齢が6か月の時点の対象の属性を表1に示す。母親の平均年齢は29.3±3.4歳であり、父親の平均年齢は31.1±4.5歳であった。また育児休業中の者も含め、現在職業をもっている者は38.5%であった。今回出産した児以外にすでに子どもがいる者は20.5%であり、いずれも1人であった。

2. 家事および育児役割に対する母親の理想, 父親の認識, 現実

家事役割に対する母親の理想, 父親の認識, 現実を図1-1, 図1-2, 図1-3に示す。家事役割に対する母親の理想はいずれの時期とも「母親中心」が最も多く、次いで「両親同等」であった。父親の認識は「母親中心」, 「母親のみ」の順に多かった。現実には「母親中心」, 「母親のみ」の順に多かった。いずれの質問項目においても「父親中心」, 「父親のみ」と回答した者はいなかった。

表1 対象の属性

項 目		n = 39
母親の年齢	平均	29.3±3.4歳
	20～24歳	5(12.8)
	25～29歳	12(30.8)
	30～34歳	20(51.3)
	35歳以上	2(5.1)
父親(夫)の年齢	平均	31.1±4.5歳
	22～24歳	3(7.7)
	25～29歳	11(28.2)
	30～34歳	18(46.2)
	35歳以上	7(17.9)
母親の職業	有*1)	15(38.5)
	無	24(61.5)
子どもの人数*2)	0人	31(79.5)
	1人	8(20.5)

人 (%)

子どもの年齢が6か月の時点の値である

*1) 育児休業中も含む

*2) 今回出産した児以外の子どもの人数

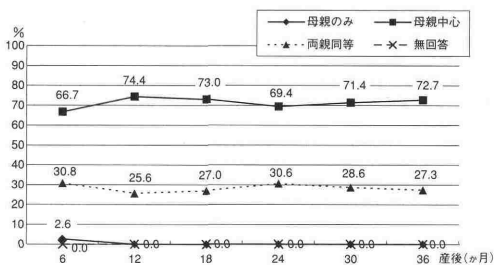


図1-1 家事役割に対する母親の理想

註) 家事役割に対する母親の理想について、「母親のみ」, 「母親中心」, 「両親同等」, 「父親中心」, 「父親のみ」で質問した結果を産後の時期毎に示す。「父親中心」, 「父親のみ」はすべての時期で回答がみられなかったため省略した。

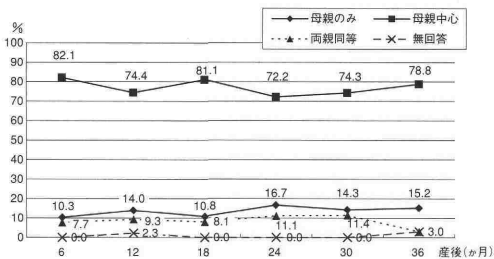


図1-2 家事役割に対する父親の認識

註) 家事役割に対する父親の認識について、「母親のみ」, 「母親中心」, 「両親同等」, 「父親中心」, 「父親のみ」で質問した結果を産後の時期毎に示す。「父親中心」, 「父親のみ」はすべての時期で回答がみられなかったため省略した。

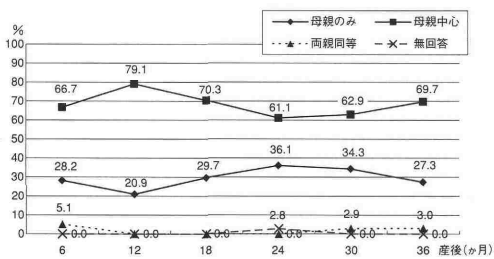


図1-3 家事の現実

註) 家事の現実について、「母親のみ」, 「母親中心」, 「両親同等」, 「父親中心」, 「父親のみ」で質問した結果を産後の時期毎に示す。「父親中心」, 「父親のみ」はすべての時期で回答がみられなかったため省略した。

産後3年間の家事役割に対する母親の理想、父親の認識、現実、時期による変動はほとんどなく、 χ^2 検定による有意差も認められなかった。

育児役割に対する母親の理想、父親の認識、現実を図2-1、図2-2、図2-3に示す。育児役割に対する母親の理想はいずれの時期とも「両親同等」が最も多く、次いで「母親中心」であった。父親の認識は「母親中心」、「両親同等」の順に多かった。現実には「母親中心」が多く、「母親のみ」、「両親同等」はほぼ同値で少数であった。家事役割と同様、いずれの質問項目においても「父親中心」、「父親のみ」、さらに母親の理想においては「母親のみ」と回答した者はいなかった。

産後3年間の育児役割に対する母親の理想、

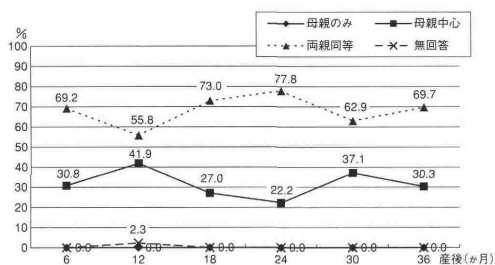


図2-1 育児役割に対する母親の理想

註) 育児役割に対する母親の理想について、「母親のみ」、「母親中心」、「両親同等」、「父親中心」、「父親のみ」で質問した結果を産後の時期毎に示す。「父親中心」、「父親のみ」はすべての時期で回答がみられなかったため省略した。

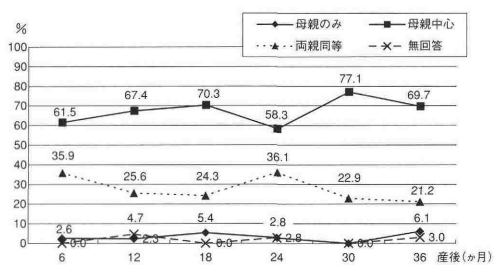


図2-2 育児役割に対する父親の認識

註) 育児役割に対する父親の認識について、「母親のみ」、「母親中心」、「両親同等」、「父親中心」、「父親のみ」で質問した結果を産後の時期毎に示す。「父親中心」、「父親のみ」はすべての時期で回答がみられなかったため省略した。

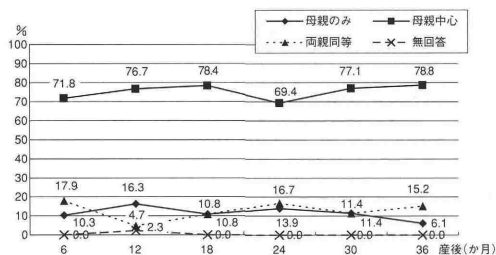


図2-3 育児の現実

註) 育児の現実について、「母親のみ」、「母親中心」、「両親同等」、「父親中心」、「父親のみ」で質問した結果を産後の時期毎に示す。「父親中心」、「父親のみ」はすべての時期で回答がみられなかったため省略した。

父親の認識、現実においても時期による有意差は認められなかったが、母親の理想について12か月では他の時期に比べ「母親中心」が最も多く、「両親同等」は最も少なかった。また母親の理想、父親の認識、現実について24か月では「両親同等」が多くなり、「母親中心」は最も少なかった。

3. 家事および育児役割に対する母親の理想、父親の認識、現実とSTAI(状態不安、特性不安)、SDS得点との関連

家事および育児役割に対する母親の理想、父親の認識、現実とSTAI(状態不安、特性不安)、SDS得点との関連を表2-1、表2-2に示す。家事役割に対する母親の理想は、6か月で状態不安 ($p < 0.05$)、SDS ($p < 0.05$)、12か月で状態不安 ($p < 0.01$)、24か月で状態不安 ($p < 0.05$)、特性不安 ($p < 0.05$)、SDS ($p < 0.01$)、36か月でSDS ($p < 0.05$)に有意差が認められた。「母親のみ」との回答は6か月のわずか1人であったためこの者を除外すると、30か月以外のいずれの時期もすべての精神状態の尺度得点で「両親同等」、「母親中心」の順に高かった。父親の認識は、18か月で状態不安 ($p < 0.05$)に有意差が認められ、「両親同等」、「母親中心」、「母親のみ」の順に高かったが、その他は一貫した傾向はみられなかった。現実には、24か月でSDS ($p < 0.05$)に有意差が認められ、「母親中心」、「母親のみ」の順に高かった。「両親同等」は少数であり、除外しても明らかな傾向は

表 2-1 家事役割に対する母親の理想, 父親の認識, 現実と STAI (状態不安, 特性不安), SDS 得点との関連

精神状態	家事役割	産後 (か月)																	
		6			12			18			24			30			36		
		n	M	SE	n	M	SE	n	M	SE	n	M	SE	n	M	SE	n	M	SE
状態不安	母親の理想																		
	母親のみ	1	42.0	-	0	-	-	0	-	-	0	-	-	0	-	-	0	-	-
	母親中心	26	37.2	1.8 *	32	36.9	1.4 **	27	39.5	2.2	25	36.9	1.5 *	25	41.6	0.8	24	38.3	2.0
	両親同等	12	47.7	2.8	11	46.5	2.7	10	42.7	3.4	11	48.0	4.2	10	39.3	1.7	9	41.6	2.6
	父親の認識																		
	母親のみ	4	37.8	1.4	6	39.3	3.7	4	31.5	0.6	6	37.3	3.3	5	41.4	3.0	5	41.2	4.2
	母親中心	32	41.0	1.9	32	38.4	1.7	30	40.4	2.0 *	26	41.2	2.4	26	41.4	0.8	26	38.6	1.9
	両親同等	3	39.7	8.1	4	44.5	3.3	3	51.7	6.7	4	39.3	1.9	4	37.8	0.8	1	44.0	-
	現実																		
	母親のみ	11	41.6	2.9	9	36.8	2.0	11	38.7	2.9	13	39.5	3.4	12	40.8	1.6	9	39.6	2.6
	母親中心	26	40.9	2.1	34	40.1	1.7	26	41.1	2.3	22	40.8	2.3	22	41.1	0.9	23	39.2	2.1
	両親同等	2	30.5	4.5	0	-	-	0	-	-	0	-	-	1	40.0	-	1	37.0	-
特性不安	母親の理想																		
	母親のみ	1	45.0	-	0	-	-	0	-	-	0	-	-	0	-	-	0	-	-
	母親中心	26	40.7	2.0	32	41.7	1.7	27	42.9	2.4	25	39.0	1.8 *	25	43.9	1.1	24	42.1	2.4
	両親同等	12	47.1	2.9	11	48.7	2.6	10	44.1	2.7	11	48.6	3.8	10	40.6	2.1	9	45.6	2.9
	父親の認識																		
	母親のみ	4	43.0	5.5	6	40.5	4.1	4	34.0	3.7	6	36.3	3.3	5	42.2	2.4	5	44.4	6.5
	母親中心	32	43.3	1.9	32	43.2	1.8	30	44.0	2.1	26	43.6	2.4	26	43.3	1.2	26	42.0	2.0
	両親同等	3	37.7	3.5	4	49.5	5.2	3	47.7	2.7	4	39.8	2.3	4	41.8	4.1	1	48.0	-
	現実																		
	母親のみ	11	43.0	3.0	9	42.3	2.9	11	40.7	3.4	13	39.3	3.5	12	43.2	2.0	9	40.7	3.6
	母親中心	26	42.2	1.8	34	43.8	1.8	26	44.3	2.2	22	43.6	2.2	22	42.8	1.2	23	43.8	2.3
	両親同等	2	49.5	18.5	0	-	-	0	-	-	0	-	-	1	44.0	-	1	47.0	-
SDS	母親の理想																		
	母親のみ	1	46.0	-	0	-	-	0	-	-	0	-	-	0	-	-	0	-	-
	母親中心	26	37.6	1.1 *	32	40.2	1.4	27	40.1	1.4	25	37.3	1.4 **	25	43.0	0.9	24	39.8	1.5 *
	両親同等	12	42.9	1.7	11	44.8	2.3	10	41.2	1.8	11	46.2	2.8	10	41.3	1.3	9	47.0	3.6
	父親の認識																		
	母親のみ	4	38.5	3.3	6	38.7	3.7	4	36.8	4.3	6	37.3	2.7	5	41.8	1.7	5	41.8	4.3
	母親中心	32	39.6	1.1	32	41.8	1.4	30	40.6	1.3	26	41.0	1.8	26	42.4	0.9	26	40.8	1.7
	両親同等	3	38.7	2.4	4	39.3	3.8	3	42.7	2.4	4	37.5	4.7	4	44.5	0.9	1	51.0	-
	現実																		
	母親のみ	11	38.4	1.9	9	42.7	2.6	11	39.3	2.5	13	37.1	2.7	12	41.2	0.9	9	38.8	2.4
	母親中心	26	39.7	1.2	34	41.1	1.4	26	40.9	1.3	22	41.8	1.7 *	22	43.3	1.1	23	42.8	2.0
	両親同等	2	42.0	8.0	0	-	-	0	-	-	0	-	-	1	43.0	-	1	45.0	-

Kruskal Wallis 検定による

** : p < 0.01, * : p < 0.05

「父親中心」、「父親のみ」はすべてにおき回答がみられなかったため項目として掲載していない

なかった。

育児役割に対する母親の理想は, 6 か月で特性不安 (p < 0.01), 12 か月で状態不安 (p < 0.01) に有意差が認められ, 「両親同等」, 「母親中心」の順に高かった。いずれの時期もすべての精神状態の尺度得点で「両親同等」, 「母親中心」の順に高かった。父親の認識は, 有意差は認められなかった。「母親のみ」との回答は少数であったため除外すると, 12 か月まではいずれの精神状態の尺度得点で同値, もしくは「母親中心」, 「両親同等」の順に高かったが, それ以降は一貫した傾向がみられなかった。現実には, 6 か月で状態不安 (p < 0.05), SDS (p < 0.01) に有意差が認められ, 「母親中心」, 「母親のみ」,

「両親同等」の順に高かった。24 か月まではすべての精神状態の尺度得点で同値, もしくは「母親のみ」か「母親中心」と回答した者が高く, 「両親同等」と回答した者が低かった。それ以降は一貫した傾向はみられなかった。

4. 性役割の差得点と STAI, SDS 得点との関連

性役割の差得点と STAI, SDS 得点との関連を表 3 に示す。家事, 育児役割に対する母親の理想と現実との差および父親の認識との差 (性役割の差得点) において -1 点と 2 点の者は 1 ~ 3 人とわずかであったため, これらを除き 0 点と 1 点の 2 群で比較した。

家事役割に対する母親の理想と現実との差

表2-2 育児役割に対する母親の理想、父親の認識、現実とSTAI（状態不安、特性不安）、SDS得点との関連

精神状態	育児役割	産後(か月)																	
		6			12			18			24			30			36		
		n	M	SE	n	M	SE	n	M	SE	n	M	SE	n	M	SE	n	M	SE
状態不安	母親の理想																		
	母親のみ	0	-	-	0	-	-	0	-	-	0	-	-	0	-	-	0	-	-
	母親中心	12	35.8	1.9	18	34.3	1.6**	10	36.2	2.7	8	36.8	3.5	13	40.2	1.1	10	37.2	3.2
	両親同等	27	42.7	2.1	24	43.3	1.8	27	41.9	2.3	28	41.3	2.1	22	41.5	1.0	23	40.1	1.9
	父親の認識																		
	母親のみ	1	37.0	-	1	43.0	-	2	35.5	4.5	1	34.0	-	0	-	-	2	43.0	3.0
	母親中心	24	42.0	2.0	29	39.3	1.9	26	40.2	2.1	21	40.6	2.7	27	41.2	0.8	23	39.5	2.2
	両親同等	14	38.4	3.0	11	38.6	2.1	9	42.1	4.7	13	40.2	2.7	8	40.3	1.7	7	36.9	3.0
	現実																		
	母親のみ	4	38.0	2.5	7	41.6	2.9	4	46.8	8.8	5	46.4	7.3	4	41.3	2.6	2	42.5	2.5
	母親中心	28	43.3	1.9*	33	39.6	1.7	29	39.7	1.7	25	39.6	2.0	27	40.6	0.8	26	39.9	1.9
	両親同等	7	31.0	2.5	2	30.0	1.0	4	39.0	8.9	6	38.3	3.9	4	43.0	2.9	5	34.6	3.5
特性不安	母親の理想																		
	母親のみ	0	-	-	0	-	-	0	-	-	0	-	-	0	-	-	0	-	-
	母親中心	12	36.6	2.6**	18	41.2	2.7	10	39.5	3.2	8	40.9	4.8	13	42.8	1.5	10	41.6	3.7
	両親同等	27	45.6	1.9	24	45.2	1.8	27	44.6	2.2	28	42.3	2.0	22	43.1	1.3	23	43.7	2.2
	父親の認識																		
	母親のみ	1	31.0	-	1	52.0	-	2	40.5	6.5	1	42.0	-	0	-	-	2	49.0	5.0
	母親中心	24	45.2	2.2	29	43.9	2.0	26	42.8	2.4	21	42.8	2.9	27	42.8	1.1	23	42.0	2.5
	両親同等	14	39.6	2.1	11	41.2	2.4	9	45.2	3.5	13	40.9	2.1	8	43.4	2.3	7	42.7	1.7
	現実																		
	母親のみ	4	41.5	6.7	7	46.4	3.3	4	45.8	7.7	5	47.8	6.9	4	46.5	5.6	2	45.5	11.5
	母親中心	28	44.6	2.0	33	43.5	1.8	29	43.3	1.9	25	41.2	2.2	27	42.2	1.0	26	42.4	2.2
	両親同等	7	36.4	1.2	2	33.5	3.5	4	40.5	9.4	6	40.3	2.6	4	44.3	2.1	5	45.8	3.3
SDS	母親の理想																		
	母親のみ	0	-	-	0	-	-	0	-	-	0	-	-	0	-	-	0	-	-
	母親中心	12	37.3	1.4	18	39.0	1.9	10	39.1	1.9	8	38.6	2.8	13	42.3	1.6	10	41.2	2.6
	両親同等	27	40.4	1.3	24	43.3	1.5	27	40.9	1.4	28	40.4	1.7	22	42.7	0.8	23	42.0	2.0
	父親の認識																		
	母親のみ	1	33.0	-	1	51.0	-	2	43.0	1.0	1	44.0	-	0	-	-	2	50.0	2.0
	母親中心	24	40.5	1.2	29	41.5	1.6	26	40.2	1.4	21	40.1	2.0	27	42.0	0.9	23	40.4	1.8
	両親同等	14	38.1	1.8	11	39.7	1.9	9	40.3	2.2	13	39.6	2.4	8	44.4	1.0	7	41.6	3.2
	現実																		
	母親のみ	4	39.5	2.6	7	44.4	2.2	4	44.0	4.5	5	40.6	6.0	4	40.8	1.9	2	35.0	5.0
	母親中心	28	41.1	1.1**	33	41.4	1.4	29	40.5	1.1	25	39.9	1.6	27	42.3	0.9	26	42.1	1.7
	両親同等	7	32.7	0.4	2	32.5	5.5	4	35.8	5.6	6	40.0	3.3	4	46.0	1.1	5	42.6	5.1

Kruskal Wallis 検定による

「父親中心」、「父親のみ」はすべてにおき回答がみられなかったため項目として掲載していない

** : p < 0.01, * : p < 0.05

(性役割の差得点)は、12か月、36か月で0点の者が多く、6か月、18か月、24か月、30か月では1点の者が多かった。家事役割に対する母親の理想と父親の認識との差(性役割の差得点)は、いずれの時期も1点の者より0点の者が多かった。家事役割において、12か月まではすべての精神状態の尺度得点で性役割の差得点が0点の者より1点の者が高く、中でも6か月の母親の理想と現実との差では状態不安(p < 0.01)に有意差が認められた。30か月の母親の理想と現実との差では特性不安(p < 0.05)に有意差が認められたが、18か月以降は一貫した傾向はみられなかった。

育児役割に対する母親の理想と現実との差

(性役割の差得点)は、同人数であった30か月以外、いずれの時期も1点の者が多かった。母親の理想と父親の認識との差(性役割の差得点)は、6か月、12か月、24か月、30か月、36か月では0点の者が多く18か月では1点の者が多かった。育児役割において、24か月まではすべての精神状態の尺度で性役割の差得点が0点の者より1点の者が高く、6か月の母親の理想と現実との差ではSTAI(p < 0.01)およびSDS(p < 0.01)、12か月の母親の理想と現実との差では状態不安(p < 0.01)およびSDS(p < 0.05)、母親の理想と父親の認識の差では状態不安(p < 0.01)に有意差が認められた。

表3 性役割の差得点とSTAI (状態不安, 特性不安), SDS 得点との関連

性役割	精神状態	性役割の差得点	産後 (か月)																				
			6			12			18			24			30			36					
			n	M	SE	n	M	SE	n	M	SE	n	M	SE	n	M	SE	n	M	SE			
状態不安	母親理想- 現実	0	16	35.4	1.9	**	24	37.0	1.7	16	40.1	3.2	15	36.3	2.0	15	41.2	0.8	16	38.8	2.9		
		1	20	46.1	2.2		18	42.6	2.2	21	40.6	2.2	17	43.1	2.5	16	41.8	1.3	14	38.7	1.8		
状態不安	母親理想- 父親認識	0	25	38.7	1.9		29	36.9	1.4	25	40.0	2.1	19	37.4	1.7	21	41.1	0.8	22	38.7	2.2		
		1	13	45.2	2.8		10	42.5	3.4	10	39.6	3.6	15	44.5	3.6	11	42.0	1.6	8	38.4	2.8		
家事役割	特性不安	母親理想- 現実	0	16	39.9	2.1		24	42.1	2.2	16	44.4	3.3	15	40.9	2.5	15	44.9	1.0	16	42.8	3.1	
			1	20	43.6	2.1		18	44.6	2.0	21	42.3	2.2	17	41.6	2.6	16	40.5	1.7	14	43.0	2.7	
家事役割	特性不安	母親理想- 父親認識	0	25	41.1	1.9		29	42.3	1.8	25	44.2	2.4	19	40.3	2.1	21	43.4	1.3	22	42.9	2.3	
			1	13	46.9	3.0		10	42.9	3.4	10	39.9	3.4	15	44.6	3.5	11	41.2	1.8	8	39.0	3.6	
SDS	状態不安	母親理想- 現実	0	16	38.0	1.3		24	39.5	1.5	16	40.6	1.7	15	39.4	1.8	15	43.9	1.3	16	40.1	2.1	
			1	20	40.1	1.5		18	43.7	1.9	21	40.2	1.5	17	39.5	2.3	16	41.7	1.0	14	43.7	2.6	
SDS	状態不安	母親理想- 父親認識	0	25	38.5	1.1		29	40.3	1.4	25	40.6	1.4	19	38.8	1.7	21	43.2	1.0	22	40.9	1.6	
			1	13	41.6	1.9		10	41.5	2.8	10	38.9	2.4	15	42.9	2.5	11	41.2	1.3	8	39.9	3.8	
状態不安	特性不安	母親理想- 現実	0	15	34.7	1.8	**	16	33.3	1.8	**	13	37.4	3.2	14	37.4	2.5	16	40.8	1.1	15	36.3	2.4
			1	21	45.6	2.2		23	42.5	1.8	**	21	40.6	2.0	17	40.9	2.5	16	41.2	1.1	16	41.5	2.4
状態不安	特性不安	母親理想- 父親認識	0	19	39.8	2.1		27	36.3	1.4	**	15	40.2	3.3	21	38.9	2.1	21	40.2	0.9	17	37.1	2.2
			1	17	43.5	2.6		12	46.1	3.0		18	41.7	2.5	13	43.0	3.7	14	42.1	1.2	13	41.3	3.0
育児役割	特性不安	母親理想- 現実	0	15	37.7	2.0	**	16	39.4	2.9	13	40.4	3.5	14	40.6	2.9	16	43.7	1.2	15	43.0	2.7	
			1	21	46.3	2.2		23	45.6	1.8	21	44.0	2.2	17	41.3	2.4	16	40.8	1.3	16	42.8	2.9	
育児役割	特性不安	母親理想- 父親認識	0	19	41.6	1.6		27	41.9	2.0	15	42.1	3.0	21	40.9	2.2	21	43.0	1.3	17	42.1	2.2	
			1	17	46.7	2.8		12	47.0	2.8	18	44.6	2.9	13	43.9	3.7	14	42.9	1.7	13	42.3	3.6	
SDS	状態不安	母親理想- 現実	0	15	35.9	1.3	**	16	37.8	2.2	*	13	38.6	2.1	14	39.2	2.1	16	43.6	1.3	15	41.7	2.3
			1	21	41.9	1.3		23	43.0	1.4		21	40.4	1.3	17	40.5	2.0	16	41.6	0.9	16	42.7	2.3
SDS	状態不安	母親理想- 父親認識	0	19	39.6	1.3		27	39.7	1.4		15	39.5	1.8	21	39.2	1.8	21	43.1	1.0	17	41.4	2.0
			1	17	40.4	1.6		12	44.4	2.3		18	40.8	1.8	13	41.1	2.8	14	41.7	1.0	13	39.8	2.6

Mann-Whitney 検定による

「性役割の差得点」とは母親の理想を基準として父親の認識や現実を減じた得点

「母親のみ」1点, 「母親中心」2点, 「両親同等」3点, 「父親中心」4点, 「父親のみ」5点

** : p < 0.01, * : p < 0.05

IV. 考 察

1. 性役割の特徴

本研究対象の多くが専業主婦であったためか、いずれの時期も母親の理想においては過半数の者が家事役割を「母親中心」と回答し、母親からみた父親の認識においても「母親中心」との回答が多かった。「両親同等」という回答を比較してみると、母親の理想が約3割であったのに対し、父親の認識は1割前後であった。これらより、産後3年間の家事役割については、母親の理想、父親の認識とも母親の方に家事の比重があるが、どちらかといえば父親の認識にその傾向が強くみられた。また、現実の家事役割は母親の理想や父親の認識より母親の方に比重が大きくなっていった。このことは母親がどのような理想をもっているか、パートナーである父親の認識に現実の家事分担は左右されることが考えられる。

一方、育児役割については、いずれの時期も母親の理想では多くの者が「両親同等」と回答し、父親の認識では「母親中心」が最も多かった。我部山らは、性役割観の世代間比較において、子どもが幼児期・青年期のいずれであっても父親は母親より伝統的性役割観を強くもっていることを明らかにした¹⁵⁾。これより、育児に対する父親の認識が低かった背景には、依然、性役割分業意識がみられることが窺われる。現実の育児役割は「母親中心」との回答が多く、「両親同等」は少なかった。家事同様、育児についても父親の認識の低さが影響し、実際は父親の育児への従事は少なかった。

家事と育児2つの役割を比較すると、育児は家事より父親の実施率は高かった。これは、育児はお互いの役割や責任と考え、実際においても協力していると考えられる。しかし、たとえ父親自身が「両親同等」と認識していても、わが国の男性の育児休業取得率が0.56%であるよ

うに¹⁶⁾、男性が現実的に育児に従事するのは厳しい社会であるといえる。

産後3年間の家事および育児役割ともに時期による有意差は認められなかったが、育児役割に対する母親の理想について12か月では他の時期に比べ「母親中心」が多く、「両親同等」は少なくなっていた。これは、子どもが12か月頃になると母親を強く求め、後追いが始まる。そのため、母親は子どもにとって自分ではなくてはならない存在と考え、育児の中心となるのはやむを得ないという認識をもつのではないかと推察される。また、育児役割に対する母親の理想、父親の認識、現実について24か月では「両親同等」が多く、「母親中心」は少なくなった。これは、24か月頃は子どもの自己主張が顕著になってくる時期であり¹⁷⁾、母親一人では育児が困難であると両親ともに認識することが一因として考えられる。

2. 性役割と精神状態との関連

性役割、とくに家事や育児に対する母親の理想、父親の認識、現実と母親の精神状態との関連について検討した。家事および育児役割に対する母親の理想は、家事の30か月を除きいずれの時期も「両親同等」と回答した者が不安や抑うつが最も強かった。著者らの既報¹⁾では、母親が理想で「両親同等」と考えていても父親の認識や現実と相違がある場合は不安や抑うつが強くなり、家事や育児役割は母親が主であると考える者は不安や抑うつが強くないことを報告した。しかし、牧野は「性役割分業」のしくみにはめこまれてしまっている人ほど育児不安に陥りやすいことを指摘した³⁾。また、石橋らの乳幼児をもつ両親を対象とした調査でも「育児は母親の仕事である」と回答した者の方が「育児は夫婦でするものである」と回答した者より両親ともに不安度が有意に高かった¹⁸⁾。本研究は、これらの結果と異なる結果が得られたため、性役割との関連について今後さらなる検討が必要と考えられる。

家事役割の父親の認識や現実においては一貫した傾向がみられなかったが、育児役割の父親の認識は12か月まではいずれの精神状態の尺度得点で同値、もしくは「母親中心」、「両親同

等」の順に高かった。現実には24か月まではいずれの精神状態の尺度得点で同値、もしくは「母親のみ」か「母親中心」と回答した者が高く、「両親同等」と回答した者が低かった。これらに関しても母親の理想と同様、母親の理想と父親の認識や現実との相違が母親の不安や抑うつを強め、逆に父親の理解や従事は母親の不安や抑うつを弱めると考えられる。牧野は、夫が実際にどうであるかは別として、少なくとも妻が夫は子育てに責任を持っていないと感じている場合に育児不安が高くなるが、夫も一緒に責任を持っていて感じられる場合には妻は自信と余裕を持って子育てができると述べている³⁾。「現実」とはあくまで母親の認識に基づく回答であり、実際の役割分担との関係を示すものではないが、子どもの年齢が低いうちは父親がともに育児に従事しているという認識を母親がもつ場合、母親の精神状態は良好であることが本研究からも明らかとなった。

3. 性役割の差得点からみた精神状態の特徴

次に母親の理想と現実や父親の認識との相違が、実際に母親の精神状態にどのような影響を及ぼしているのかについて検討を行った。家事役割に対する母親の理想と現実との差および父親の認識との差（性役割の差得点）は、12か月までは母親に比重が大きいほど不安や抑うつが強く、とくに6か月までに有意差が認められた。育児役割に対する母親の理想と現実との差および父親の認識との差（性役割の差得点）においても、24か月までは母親に比重が大きいほど不安や抑うつが強く、とくに12か月までに有意差が認められた。巴らの2歳6か月児の母親を対象とした調査では、両親に「協同型（生活面）」への認識のずれがある場合に母親の育児不安が強かった¹⁹⁾。また、原口らは母親自身がもつ3側面（家庭人としての自分、社会人および職業人としての自分、個人としての自分）の理想と現実の構成割合に生じたギャップとの関連に着目し、「家庭人としての自分」で現実が理想を上回ったり、「個人としての自分」で現実が理想を下回るほど育児不安が喚起されることを報告した²⁰⁾。これらより、子どもの年齢が低い段階では家事や育児に対する役割分担について両

親間で話し合うこと, また母親に家事や育児の比重が大きい場合は軽減すること, さらに育児期の母親が「個人」としての生き方を実現できることが母親の精神状態の維持・向上にとって重要であることが示唆された。

本研究では, 家事は18か月以降, 育児は30か月以降では母親の精神状態と父親の要因との関連がみられなかった。これは, 子どもが1歳6か月頃になると自我が芽生え, 言語能力も発達してくる¹⁷⁾。そして, 2, 3歳をピークに自己中心的な言動が顕著となり, 多くの母親が思い通りにならない現状に苛立ちを感じる事が先行研究において指摘されている⁵⁾⁹⁾¹⁰⁾²¹⁾。また, 夫のサポートと母親のストレスに関する調査では夫のサポートは, 子ども自身の特性である聞き分けのない行動やまわりつかれることから生じる母親のストレスにはあまり有効でないことが示された²²⁾。これらより, 父親のサポートは子どもの成長・発達につれ, その影響力は弱くなる事が考えられる。そのため, 1~3歳頃の子どものもつ母親への育児支援を行う際は, 子どもの特性とそれに対する母親の認識・感情について把握し, 不安やストレスが強い場合は子どもの発達に関する知識を伝えたり, 母親の大変さに共感する態度で接することが必要と考える。

最後に, 本研究の対象は, 自ら育児支援事業に参加した者であり, 育児や自分自身に関心が高い集団といえる。また調査地域が限定されていること, 対象数が少ないこと, 父親への直接の調査がないことなどから, 結果の一般化には限界がある。今回は属性の相違による比較検討は行わなかったが, 性別は母親の就労, 子どもの年齢や人数(産後の時期や出産経験)等により異なることが報告されているため⁶⁾⁹⁾²³⁾, 今後はこれらの点を踏まえて検討を重ねていきたい。

本研究の趣旨をご理解いただき, ご協力くださった保健所の職員の皆様, 参加者の皆様に深く感謝します。

なお, 本稿の要旨は第53回日本小児保健学会学術集会にて発表した。

引用文献

- 1) 山口孝子, 堀田法子. 6か月児をもつ母親の精神状態に関する研究(第2報)一性別と精神状態との関連から一. 小児保健研究 2005; 64(1): 11-17.
- 2) 大日向雅美. 母性の研究. 第5刷 東京: 川島書店, 1996.
- 3) 牧野カツコ. 乳幼児をもつ母親の生活と<育児不安>. 家庭教育研究所紀要 1982; 3: 34-55.
- 4) 川井 尚, 庄司順一, 千賀悠子, 他. 育児不安に関する臨床的研究V一育児困難感のプロフィール評定質問紙の作成一. 日本子ども家庭総合研究所紀要 1999; 35: 109-143.
- 5) 日下部典子, 坂野雄二. 3歳児をもつ母親のストレス一. ストレス科学 2001; 15(4): 276-283.
- 6) 清水嘉子, 西田公昭. 育児ストレス構造の研究. 日本看護研究学会雑誌 2000; 23(5): 55-67.
- 7) 奈良間美保, 兼松百合子, 荒木暁子, 他. 日本版 Parenting Stress Index (PSI) の信頼性・妥当性の検討. 小児保健研究 1999; 58(5): 610-616.
- 8) 榮 玲子, 舟越和代, 小川佳代, 他. 乳児期の子どもをもつ母親の育児ストレス(第1報)一育児ストレス一因子の解析一. 香川県立医療短期大学紀要 2003; 5: 11-16.
- 9) 舟越和代, 榮 玲子, 小川佳代, 他・乳児期の子どもをもつ母親の育児ストレス(第2報)一対象特性からみた育児ストレス一. 香川県立医療短期大学紀要 2003; 5: 17-24.
- 10) 植村裕子, 三浦浩美, 野口純子, 他. 香川県における3歳児をもつ母親の育児ストレス構造一育児ストレス一尺度を用いて一. 香川母性衛生学会誌 2002; 2(1): 62-67.
- 11) 吉永茂美, 眞鍋えみ子, 瀬戸正弘, 他. 育児期の女性における育児ストレスの構造に関する探索的研究. 母性衛生 2006; 46(4): 642-648.
- 12) 吉永茂美, 眞鍋えみ子, 瀬戸正弘, 他. 育児ストレス一尺度作成の試み. 母性衛生 2006; 47(2): 386-395.
- 13) 水口公信, 下仲順子, 中里克治. 日本版 STAI 使用手引, 京都: 三京房, 1991.
- 14) 福田一彦, 小林重雄. 日本版 SDS 使用手引, 京都:

- 三京房, 1983.
- 15) 我部山キヨ子, 寺田香里, 池田浩子, 他. 性役割観の世代間比較に関する研究—幼児と青年の父母の調査より—. 母性衛生 2003; 44 (2): 274-280.
 - 16) 母子衛生研究会. 母子保健の主なる統計 (2005) 2006: 149.
 - 17) 岡堂哲雄, 乳幼児期の発達臨床心理. 岡堂哲雄. 小児ケアのための発達臨床心理. 第1版 東京: へるす出版 1999: 13-25.
 - 18) 石橋君子, 大坪智美, 正崎仁恵, 他. 夫婦の意識が相互の育児不安に及ぼす影響. 母性衛生 2002; 43 (4): 541-548.
 - 19) 巴奈緒美, 泊 祐子, 見岳誓子. 幼児をもつ夫婦の性役割意識と妻の育児不安との関連について. 家族看護学研究 2001; 7 (1): 100-101.
 - 20) 原口由紀子, 松浦治代, 矢倉紀子, 他. 母親の個人としての生き方志向と育児不安との関連. 小児保健研究 2005; 64 (2): 265-271.
 - 21) 山下美弥, 尾方美智子. 子どもの発達段階別にみた母親の育児不安, 自我状態—乳児期と幼児期の比較を通して—. 香川医科大学看護学雑誌 2003; 7 (1): 73-79.
 - 22) 小川佳代, 舟越和代, 榮 玲子, 他. 3歳児をもつ母親の育児ストレス—夫のサポート要因からの分析—. 第33回小児看護 2002: 82-84.
 - 23) 我部山キヨ子. 産後2年までの自己概念の変化—出産・育児と自己概念の関連性—. 日本女性心身医学会雑誌 2002; 7 (2): 212-219.